

木原雅子さんが語る「WYSHプロジェクト」

子どもの力を引き出せ！
「自分スイッチ」の入った子どもたちへ
オーダーメイドの授業をデザイン



Photo: 中西真誠

さまざまな問題を抱える10代の子どもたち。彼らに「WYSH教育」を行う
社会疫学者の木原雅子さん（京都大学大学院准教授）に、自分で考え切り拓く、こころの自立を目指す「WYSH教育」について聞いた。



夢と希望をもてる子ども、二階建て方式で育てる

こんな話を聞いていると、木原さんはまるで教育者のようだが、実は社会疫学を研究している。「今のところ、社会疫学を研究しているのは世界で私たちだけなんです。社会疫学を簡単にいうと、ソーシャルマーケティングを基礎として、医学と社会学を完全に同レベルで統合するというものです。統計学に基づいた量的研究（アンケート）と質的研究（イン

タビュー）を融合して現状を把握し、対象者のニーズと価値観を理解することで、より効果的なプログラムを組み立て、その指導方法を研究開発しています」

そもそも、このWYSHプロジェクトが生まれたきっかけは、エイズの疫学研究にも従事していた木原さんがエイズ予防教育にかかわったことだった。

2002年当時、90年代から急上昇していた高校2年生の性経歴率が40・9パーセントとピークを迎えていたという。99年に経口避妊薬のピルが解禁になって、00年代の初めには性感症やエイズが増加、10代の中絶も大幅に上昇する。

木原さんはその時、性教育の必要性を痛切に感じ、エイズ予防教育をスタートさせる。「まずは全体を把握するためのアンケート調査と、その人がなぜその行動をとり、その課題を抱えているのかを知るためのインタビュー調査の2つを徹底して行いました。すると、どの地域の学校でも、生徒たちのインタビュー中に『イジラレキャラ』という言葉がよく出てくるようになり、子どもたちの間で『いじめ』が広がっているのではないかと危惧するようになったのです」

そこで04年からは、いじめについての調査も開始。その時点で子どもたちにとって一番問題となっていることは何か、それを解決するためにどうしたらいいのか。

そう考えるうちに、取り組むテーマはどんどん広がっていった。「性行動やいじめ、コミュニケーション力の低下など、症状として出る問題行動は異なっても、人間関係の希薄さや、自己肯定感の低さなど、その根っこにあるものは同じなんですね。そこを放置したままでは、表面だけを治しても対症療法にしかすぎない。根本のところからかわって、学校として対処できる教育方法を開発普及させようと思ったんです」

中絶経験も多く性行動の激しい女子生徒にインタビューしていた時だった。木原さんはその生徒が将来に何の夢ももっていないことに、ふいに気づく。「このままだと性感症やHIVに感染する可能性もあるし、身体も危ない。彼女自身もそれをわかっていながら、一緒にいてくれる相手がいて寂しくなければいいと言っている。夢と希望をもてる子どもを育てる——、それを最終目標にしなければ問題は解決しないと切実に感じたんなんです」

だからこそ、WYSHプロジェクトは、土台の部分に「自尊感情の向上や人間関係の構築などを行う人間基礎教育」、その上に「いじめ防止、性教育、コミュニケーション教育など」と二階建て方式で構成し、子どもたちが自分で考え切り拓いていく力を身につけ、自立することを目的としている。

1回のかかりに賭ける。授業準備に数カ月

静かに席に座っていることさえもままならなかった生徒たちが、教室のスクリーンに映し出される映像を食い入るように見つめ、身を乗り出して講師の話の聞いていた。たとえば、性教育の授業では、性病にかかった痛みはサッカーの練習中に股間を蹴られた痛さに匹敵すると説明されると、教室に爆笑が沸き起こる。いのちの教育の授業では、いじめなどのつらい思いに出に涙を流す生徒や、熱心に自分の思いを語り、文章にしたためる生徒たちの姿が印象的だった。

これは、木原雅子さんが小中高生を対象に展開している「WYSH (Well-being of Youth in Social Happiness) プロジェクト」の授業の一場面。その映像を見て、徹底的につくりこまれた授業の新鮮さとおもしろさに心から驚いた。

この1回の特別授業のために、準備に費やす期間はなんと数カ月という。普段は無機質な教室の机の上にきれいなクロスを敷き、花を飾る。授業のテーマカラーを設定したり、いつもジャージ姿の先生に一張羅を着てもらうなど、あとになってからも、その授業を鮮明に思い出せるような仕掛けが盛り込まれている。

「その学校の、その生徒たちのためだけのオーダーメイドの授業 子どもたちの潜在力、引き出したい！ 科学と感動の両方が必要」

「昔は土台の部分を家庭や地域が養ってくれましたが、今は家庭力が低下し、地域のつながりも薄いです。だから、その土台の部分をあえて学校教育の中に取り入れたい、子どもたちは力を出せない。この二つが一緒になっていないと、いじめ防止はダメ。自分の身体を守る」と啓発しても、子どもたちにメッセージは届かない。今の子どもたちは大きな潜在力をもっているのに、受け身で生きていて、「自分スイッチ」が入っていないだけだと、木原さんは言う。

「子どもたちの潜在力である芸術、運動、学問への探究心やエネルギーを、目先の人間関係のドロドロの中に埋没させてしまうのはもったいない。引っぱり出した」。そして、「人は感動しなければ動かない。でも感動だけでは社会は動かない。社会を動かすには、そこに科学的なデータがないとダメ。だから科学と感動、その両方が必要です」と言い切る。

WYSH教育は手間ひまがかかるけれど、授業後の生徒の心には確実に変化が起こり、木原さんのもとには、生徒からその後の報告や相談のメールがひっきりなしに届く。「でも、元気になるよ、ぶつ切り連絡が来なくなるんですよ（笑）」

をデザインします。単に知識の伝達ではなく、最終的に子どもたちが自分で考え行動できることを目指している。一回のかかりでグッと相手の心を動かさないといけません。そのためにはこちらも全力投球。プロの研究者として、もっているすべての技術を使います」

対象校は公募して、WYSH教育のニーズが高いと思う学校を全国から選ぶ。学校が決まると、授業予定日の数カ月前に訪れ、生徒たちの様子を知るためのアンケート調査と、実態の詳細な背景を調べるためのインタビュー調査を実施。その結果をもとに、教材の開発に力を注ぐ。授業後は、その効果についての評価も徹底して行うという。

「授業全体の構成、使用するパワーポイント、DVD、教室の雰囲気づくりなど、すべてを綿密に準備。教材に挟み込むキャラクターや授業時のBGMにも、アンケートから浮かび上がった生徒たちの価値観、好みを反映させます。普段の授業で自分の意見を言ったことがない子も、作業開始の緊張した時に、自分の好きな曲が流れていると、誰でもエンジンがかかっているでしょ？ しかも自分の身近なテーマで、どんなことを書いても笑われないような発言しやすいしかけをつくるんですよ。もちろん最後につくる映像もその子たちに向けてのオリジナルです」

くれる先生を増やすため、木原さんは授業例やデータなどを盛り込んだ事例集を作り、教員向けの研修会も実施している。

「日本は一見豊かな社会に見えますが、知られていないところで苦しんでいる子どもが山ほどいるんです。そんな子どもたちに目を向ける人が増え、すべての子どもたちが自分のいいところを見つけ、自分の力を発揮し、精いっぱい輝いてほしい。それが本当の意味での豊かな国ではないでしょうか。評論しているだけでは世の中は変わりません。微力であっても命のあるかぎりこの活動を続けようと思っています」

（松岡理絵）

きほら・まさこ
1954年、長崎県唐津市生まれ。社会疫学者。京都大学大学院医学研究科社会疫学分野准教授。国連合同エイズ計画共同センター長。医学博士。循環器疾患の基礎的研究。肺がんの遺伝素因の研究などを経て、エイズの疫学研究に参加。2000年から青少年のエイズ予防教育に携わり、WYSHプロジェクトをスタート。09年に日本子ども財団を立ち上げる。教育実論家と自ら称す。著書に「エイズを知る」（共著。角川書店）、「10代の性行動と日本社会」（ミネルヴァ書房）ほか多数。



「10代性の行動と日本社会」木原雅子／ミネルヴァ書房／1800円＋税



「WYSH教育事例集1」木原雅子編著／3800円＋税
※ご購入のお問い合わせは一般財団法人日本子ども財団 www.kodomo-zaidan.com/